

私は今、10月初演の新作オペラ「狂おしき真夏の一日」の練習に励んでいる。

作曲・三枝成彰、台本・林真理子、演出・秋元康、美術・千住博、指揮・大友直人と、豪華絢爛たる布陣による初のオペラ喜劇とあって話題騒然なのだが、稽古は大変地道である。

出来上がった楽譜をもとに、夏休み返上で副指揮者、ピアニストと日々こつこつ練習を重ね、繰り返される立ち稽古の世界に突入する。

「アッと叫ぶ驚天動地の世界を創り上げたい」という意図がどんな形で現れるのか、実は私もまだ知らず緊張している。

1997年、三枝氏とはオペラ「忠臣蔵」の綾衣役で初めてご一緒した。彼が構想に10年をかけたという「忠臣蔵」は、日本の革命的グランドオペラの誕生だった。綾衣役へ注いだエネルギーは、まるで

## 後世に残る「三枝オペラ」へキックオフ



1人の子供を産み落としたほどの衝撃と感動だった。

それは同じ時代に生きる作曲家の初演に携わる幸せであり、未知のジャングルを生き抜く戦友との大冒険のようでもあった。

今回も初演に向け、覚悟を持ち臨んではいるが、多分その予想をはるかに超える大混乱と葛藤の嵐になろう。日本人がオペラを歌うことは容易ではないが、オペラを作曲し、上演することは、奇跡に近い至難の業といえる。ワーグナーには後援者、バイエルン国王のルートヴィヒ2世がいたが、今は芸術家を支援するには大変厳しい時代だ。

しかし、いかなる艱難辛苦

を乗り越えてでも、自分の目指すオペラを創り上げたい、と叫ぶ三枝氏の信念が、人の心を揺さぶる。

彼に最高の作品を残してほしいと応援する仲間たちの情熱が、一丸となって幕が開ける。100年後、日本人作曲家のオペラ作品が世界の遺産として残るかもしれない。皆さんにぜひこの歴史的瞬間に立ち会っていただきたい。

さあ、どうなりますことやら、胸高鳴る私もギアを上げて、キックオフ！

(さとう・しのぶ＝声楽家)

—毎月第3金曜日掲載

